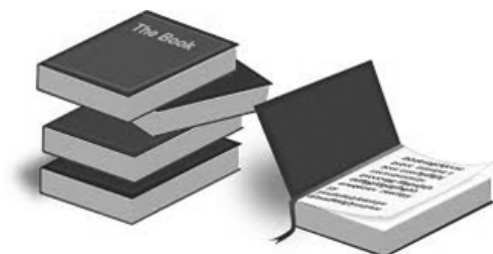


ほんばこ



No. 70

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 70 号（通巻第 86 号）

2024 年 2 月 20 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教 育 図 書 館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<https://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- | | | |
|----------------------------------|--------|---------|
| ◆ 他者と私を考える | 小林 美奈子 | 2 ～ 3 p |
| ◆ 不思議なネコから聞く地域の歴史の絵本！ | 佐藤 淳一 | 4 p |
| ◆ 書評『宙わたる教室』 | 富崎 豊和 | 5 p |
| ◆ 最近の受入図書（2023年 7 月～2024年 2 月受入） | | 6 ～ 7 p |
| ◆ 教育図書館のご案内 | | 8 p |

他者と私を考える

小林 美奈子

本との出会い

私たちは他者とともに社会で生きています。そんな当たり前の事実について、ときには深く考え、悩むこともあるのではないのでしょうか。他者と分かち合いたい、自分のことを理解してほしい、傷つきたくない、孤独な気持ち…。本の良いところは、そうしたもやもやした気持ちを、著者たちが言語化してくれるところだと思います。「私が言いたかったことはそれだ」「そんな考え方があるのか」と、悩んで迷走しているとき、抜け出すヒントをくれたのはいくつかの本たちでした。今回、「他者と私」というテーマで、2冊の本を紹介します。

「わがまま」は自分勝手なのか

① 『みんなの「わがまま」入門』

(富永京子著 左右社 2019.4)

立命館大学で社会運動の研究をされている著者が、中高一貫校で講演をした内容をもとに書かれている、社会運動についての本です。中高生向けに書かれているので、言葉は易しいですが、大人が読んでも参考になる内容だと思います。



“一緒にご飯を食べるとき、割り箸を使わない。恋バナをしていても、自分や身近な人の恋人に対して「彼氏」や「彼女」といった言葉を使わない。なるべく深夜にはコンビニやファストフ

ード店に行かない。(中略)

自分たちの生活で選ばれたり、使われたりしているものが、政治や社会といった、自分とは遠くて無関係に思えた世界とたしかにつながっていることがわかりました。” (P10)

と著者は「はじめに」で記しています。一見、「社会運動とどう関わりがあるの?」と思われるかもしれませんが、この言葉の意味をよくよく考えてみると、環境問題やLGBTQへの配慮、ブラック労働反対の意思などを窺うことができます。

本の中で著者は、「わがまま」を「自分あるいは他の人がよりよく生きるために、その場の制度やそこにいる人の認識を変えていく行動」と定義しています。「わがまま」と聞くと、「自分勝手」のようなネガティブなイメージを持たれるのではないのでしょうか。私自身もそうでした。わがままを言わず、空気を読む。なるべく「ふつう」でいようとする。しかし、「ふつう」とは何でしょう。育った環境や価値観・好みなど、人間ひとりひとり違う生き物であるのに、「ふつう」を想定してしまう。著者は、近年、社会問題が個別化しているため、声をあげづらくなっていると言います。

“人々が多様化したことで一人ひとりの苦しみや傷が個人化されていて、だからこそ隣の人と痛みを分かち合えない、…。ただ一方でたしかに社会に弱い立場の人はいて、その人たちの苦しみや痛みは、目に見えない形でまだ存在しているのです。” (P52)

と。私自身、様々な社会問題を知るたびに、その痛み苦しみを想像するようになりました。また、声をあげる必要性も感じるようになりました。

とはいえ、声をあげるということは、とてもハードルが高いと思います。そこで著者は、

“「好きなものを好きって言う」「自分が関心のあることを言葉にする」っていうのは、「わがまま」を言うための土台づくりにちゃんと
なる” (P197)

と、例としてZINEを作ることなどを提案しています。“ZINEとは「MAGAZINE」の「ZINE」で同人誌のようなもの…”)

身近なところから、「わがまま」を言う練習をしていきませんか。私たちは、よりよく生きるために「わがまま」を言って良いのです。そして、その「わがまま」が、もしかしたら社会を変えていくかもしれません。

脳の中ではだれもがひとりきり

② 『断片的なものの社会学』

(岸政彦著 朝日出版社 2015.6)

京都大学で戦後沖縄社会や生活史の研究をされている著者による、「解釈できない出来事」をめぐるエッセイです。“路上のギター弾き、夜の仕事、元ヤクザ……人の語りを聞くということは、ある人生のなかに入っていくということ。” とキャッチコピーがついているこの本は、断片的な出来事の集合体で、掴みどころがないのに心に残る、そんなエッセイです。

“不思議なことに、この社会では、ひとを尊重するということと、ひとと距離を置くということが、一緒になっています。だれか他のひとを大切にしようと思ったときに、私たちはまずなにをするかというと、そっとしておく、ほっておく、距離を取る、ということをしてしまいます。

このことは、とても奇妙なことです。ひとを理解することも、自分が理解されることもあきらめる、ということが、お互いを尊重することであるかのようにいわれているのです。

でも、たしかに一方で、ひとを安易に理解しようとすることは、ひとのなかに土足で踏み込むようなことでもあります。

そもそも、私たちは、本来的にとっても孤独な存在です。言葉にすると当たり前すぎるのですが、それでも私にとっては小さいころからの大きな謎なのですが、私たちは、これだけ多くのひとにかこまれて暮らしているのに、脳の中では誰もがひとりきりなのです。” (P240-241)

と著者はあとがきに記しています。私はこの文章がとてもお気に入りです。言われてみればそうだなと思います。ひとを尊重しようと思ったとき、距離を取ってしまう。誰かと一緒にいたとしても、孤独を感じる。その事実を、無理やり解決させようとせず、結論づけようともせず、難しいよね孤独だよね、と言葉を紡ぐ著者のスタンスに、私は助けられました。

また、著者は『岩波講座 社会学』の執筆・編集もされており、「編集にあたって」の言葉もとても素敵のため、紹介します。

“私たちにとって「私たち」は最大の謎だ。みんな何してるんだろう、どうやって生きてるんだろう。社会学はこの素朴な問いから始まる。この問いを特定の対象に限定し、実証的・経験的な方法を携えて理解しようとする。社会学を一言でいえばこうなるのかもしれない。人びとによって問われる「人びと」という問題。この問いには終わりはないが、それでも社会学者は、短い一生のあいだでようやく見えてきた問いのかけらを瓶に入れて海に流す。”

本は、著者の言葉は、私たちの見える世界を広げ、深めてくれます。日々、学び続けていきたいなと思う今日です。

(日本教職員組合 書記次長)

不思議なネコから聞く

地域の歴史の絵本！

『この場所なあに？』は、岩手県立大学の学生が岩手県岩手町豊岡地区（約 30 世帯・人口約 50 人）の方々から戦後開拓の歴史や苦労をお聞きして、それを絵本にまとめたものです。主人公のさくらちゃんが、不思議なネコとの会話を通して地域の歴史を辿ります。



『この場所なあに？』

作・絵 阿部 葉奈 竹内 千尋
高橋 彩乃 角田 帆乃香

その取り組みのことを知ったのは、2022 年 10 月に県立大・役重眞喜子先生の話をお聞きした時でした。最初から絵本の制作が目的ではなかったそうですが、総合政策学部の授業の一環として行われたフィールドワークの共同作業をきっかけに、学生たちが豊岡地区の高齢者の方々から戦争体験や開拓の苦労などの「聞き書き」をすることになり、それを知らない子どもたちに伝える方法をいろいろと考える中で、「紙芝居」を制作して「読み聞かせの会」を行うという活動に発展していきました。地域の方々と学生たちとの間に生まれた交流が、消えかけている地域の歴史を伝える形になったことを多くの人たちに知ってもらいたいと考え、当研究所で書籍化のお手伝いをさせていただくことになりました。

敗戦によって、樺太から引揚げて来た方々の想像を絶する苦労のもとに拓かれた地域も、時代の変化とともに住民減少や高齢化の波を受けているといえます。聞き書きした貴重な話をぜひ子どもたちにも伝えたいとの思いから生まれた絵本、それができる過程そのものからも学ぶべきところが多くあると考えました。

絵本の完成後、学生の代表、役重先生と一緒に、岩手県知事と岩手町長・豊岡地区代表の方を訪問して絵本の贈呈を行いました。知事からは、「歴史は生身の人間一人ひとりのもので、それが集まって地域の歴史になる。その歴史の原点に触れることができたのではないかと」県の「活力ある小集落実現プロジェクト」を活用した調査の成果に理解が示されました。また、地区の代表の方からは、「地区の歴史を絵本にしてもらったことは大変ありがたい。将来、集落がなくなったとしても地区の宝になる。都会に行った人たちにも紹介したい」とのお話をいただきました。

現在 4 年生の学生が 1 年生の時に、フィールドワークの一環として始まった地域との交流は現在も続いており、「井戸の砂洗い」などの地域行事・作業への参加や、集落が無くなったとしても出身者に見に来て欲しいと願って続けられている「桜を植える活動」への協力も継続しているとのこと。そしてそれらの活動は、後輩たちにも引き継がれるということです。



（「聞き書き」の様子：岩手県立大・役重眞喜子先生提供）

学校では、授業や行事の取り組みで地域の歴史や文化、産業などについて調べたり、住民の方々からお話を聞いてそれをまとめたり、発表したりするということが多く行われてきましたが、近年、そのような取り組みを行うことの難しさが増しているようにも思います。

人口減少や住民の都会への移動などによって、「限界」あるいはそれに近い状況にある地域は岩手県だけでなく全国にも多くあると思います。岩手町豊岡地区に限らず、それぞれの地域にそれぞれの歴史や文化が存在します。『この場所ななに？』を読んでいただくことをきっかけに、今一度身近な地域について調べたり、地域の方々からお話を聞いてそれをまとめたりする取り組みの大切さが再認識されることを願っています。

(佐藤淳一：岩手教育総合研究所所長)

【書評】

『宙わたる教室』

(伊予原新著 文藝春秋 2023.10)



架空の舞台は都立東新宿高校定時制課程。登場人物たちが定時制高校に至る経緯は千差万別。茶髪のヤンキー男子は、自分がディスレクシアと知らずドロップアウトしたため。フィリピン料理店経営の女性は幼少期に渡日し、教育を受けられなかったから。70代の男性は集団就職で上京、働きづめの人生だったからだ。リストカットの女子高生にも、そして定時制勤務を

選んだ担任にも、十人十色の背景がある。

そこで学ぶ目的もそれぞれだ。ディスレクシアのヤンキーは、運転免許を取るために必要な最低限の読み書き能力が欲しかっただけ。70代男性は、難病で入院し定時制高校に通う望を絶たれた妻に、定時制の授業を毎日再現するため。研究者の道をあきらめた彼らの担任、藤竹が定時制勤務を選んだ目的もまた一筋縄ではいかないものがある。

登場する生徒一人ひとりが、それまでの人生もその後に描いている夢も違う。それぞれが異なる元素のような生徒たちを、藤竹が定時制高校・科学部という触媒を用いて、結合し昇華させていく青春群像劇。その比重は重すぎず、軽すぎず絶妙だ。

そしてリアル。評者は20代～30代半ばまでと、40代の大半を都立の定時制高校3校で勤務をした。時期としては、断続的になるが1988年～2013年の期間。実体験があるだけに定時制高校を舞台とした小説やドラマに触れるたび、ステレオタイプで安易な描かれ方に鼻白んでしまう。しかし、この作品は違った。ストーリーに引き込まれながらも、評者自身が新採から務めた定時制高校の生徒・教員の面影、出来事が浮かぶ。まるでタイム・スリップしたかのような感覚に陥った。東新宿高校には、本物の夜間定時制高校が再現されている！

とはいえ一昔前の定時制高校が再現されているのではない。評者が勤務した頃から現在まで、定時制の生徒をとりまく環境や問題は変化したけど、学校の様子はそう変化していない。その基本を押さえた物語は定時制高校を知る入門書。さらに教育や社会に必要な多様性や、そこから生まれる協働の力を説く教育書。なにより、最高の青春小説なのである。

(富崎豊和：東京都高等学校教職員組合執行委員長)

最近の受入図書 ☆印は寄贈本

(2023 年 7 月～2024 年 2 月)

【日教組刊行物】

『日教組政策制度要求と提言』2023～2024 年度版
日本教職員組合 2023. 7

『第 64 次日教組全国学校事務研究集会資料』
日本教職員組合 2023. 7

『もっと子どもたちと向きあいたい～教職員の働き方改革の促進にむけて～』日教組委託研究
連合総研 2023. 9

【各県教組刊行物】

『日教組香川』合本版 Vol. 1-5 日教組香川教職員組合 ☆

『都高教新聞縮刷版』23 東京都高等学校教職員組合編 2019. 12 ☆

『熊本高教組 70 年』熊本県高等学校教職員組編
熊本県高等学校教職員組合 2023. 4 ☆

【文部科学省関係・法令集等】

『文部科学法令要覧』令和 6 年版 文部科学法令研究会監修 ぎょうせい 2023. 11

『諸外国の教育動向 2022 年度版』第 161 集
文部科学省著 明石書店 2023. 9

【平和・人権】

『沖縄の生活史』石原昌家・岸政彦監修 みすず書房 2023. 5

『甦る戦災樹木』菅野博貢著 さくら舎 2023. 5

『国籍と遺書、兄への手紙』安田菜津紀 ヘウレーカ 2023. 5

【防災・減災】

『災害の日本近代史』土田宏成著 中央公論新社 2023. 7

『文豪たちの関東大震災』児玉千尋編 皓星社 2023. 7

『声の聴こえる防災教育』金井景子編著 学文社 2023. 3

『自然災害防止教育と学校の役割』北俊夫著 文溪堂 2023. 1

『津波』ジェイムズ・ゴフ, ウォルター・ダッドリー 著ほか みすず書房 2023. 10

『大津波襲来』三陸河北新報社編 2011. 5 ☆

『巨大津波が襲った 3・11 大震災』河北新報社 2011. 4 ☆

【教育・経済・社会】

『まなぶことの歩みと成り立ち』遠藤野ゆり・筒井美紀著 法政大学出版局 2023. 5

『中学校の授業でネット中傷を考えた』宇多川はるか著 講談社 2023. 7

『教育現場を「臨床」する』内田良著 慶應義塾大学出版会 2023. 8

『子ども若者の権利と政策 1』末富芳・秋田喜代美・宮本みち子監修 明石書店 2023. 10

『「助けて」が言えない 子ども編』松本俊彦編
日本評論社 2023. 7

『何のためのテスト?』ケネス・J. ガーゲン, シェルト・R. ギル著 ナカニシヤ出版 2023. 3

『インクルーシブ教育ハンドブック』ラニ・フロリアン編著 北大路書房 2023. 8

『客観性の落とし穴』村上靖彦著 筑摩書房 2023. 6

『教育の経済価値』経済協力開発機構編著 明石書店 2023. 11

『「学び合う学び」を生きる』石井順治著 ぎょうせい 2023. 8

『不適切な関わりを予防する教室「安全基地」化計画』川上康則著 東洋館出版社 2023. 8

『教育政策をめぐるエビデンス』中西啓喜著 勁草書房 2023. 11

『派遣労働は自由な働き方なのか』大槻奈巳編著 青弓社 2023. 7

『ぼくが生まれた新宿、柏木団の人々と関東大震災』中條克俊著 梨の木舎 2023. 8

『近代日本メディア史』1～2 巻 有山輝雄著 吉川弘文館 2023. 8

『運動部活動から地域スポーツクラブ活動へ』友添秀則編著 大修館書店 2023. 9

『言語の本質』今井むつみ・秋田喜美著 中央公論新社 2023. 5

『小学校国語「話すこと・聞くこと」の授業技術大全』二瓶弘行編著 明治図書出版 2023. 9

『小学校・中学校国語科「情報の扱い方」の全年授業モデル』森田香緒里編著 明治図書出版 2023. 10

『身近なモノやサービスから学ぶ「情報」教室』①～⑤ 土屋誠司編 創元社 2023. 7

『「発達」を問う』浜田寿美男著 ミネルヴァ書房 2023. 4

『校則が変わる、生徒が変わる、学校が変わる』 苫野一徳監修 学事出版 2022. 10

『学校を長期欠席する子どもたち』保坂亨著 明石書店 2019. 7

『ロイロノートの ICT“超かんたん”スキル』和田誠執筆者代表 時事通信出版局 2023. 8

『公立学校の外国籍教員』中島智子・権瞳・呉永鎬・榎井縁著 明石書店 2021. 11

『教育現場と研究者のための著作権ガイド』上野達弘編 有斐閣 2021. 3

『「心の病」の脳科学』林(高木)朗子・加藤忠史編 講談社 2023. 2

『高校入試に英語スピーキングテスト?』大津由紀雄・南風原朝和編 岩波書店 2023. 11

『デジタル教育という幻想』物江潤著 平凡社 2023. 12

『みんなの「仕事図鑑」』取釜宏行・高橋貴一編著 学事出版 2023. 12

『国際的に見る教育のイノベーション』恒吉僚子・藤村宣之著 勁草書房 2023. 11

『学び直しとリカレント教育』出相泰裕編著 ミネルヴァ書房 2023. 12

『教育方法と ICT』高橋純編著 学文社 2023. 11

『1100 日間の葛藤』尾身茂著 日経 BP 2023. 9

『「令和の日本型」教育と教師』日本教師教育学会編 学文社 2023. 9

『ブラック支援』高橋淳著 KADOKAWA 2023. 9

『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに』貴戸理恵 岩波書店 2011. 4 ☆

『日本人はなぜ英語ができないか』鈴木孝夫著 岩波書店 1999. 7 ☆

『母性という神話』エリザベート・バダンテール著 筑摩書房 1998. 2 ☆

『イギリスのいい子日本のいい子』佐藤淑子著 中央公論新社 2001. 3 ☆

『娯楽の戦前史』石川弘義編著 東京書籍 1981. 12 ☆

【家庭・芸術・文学一般・その他】

『窓ぎわのトットちゃん続』黒柳徹子著 講談社 2023. 10

『宙わたる教室』伊予原新著 文芸春秋 2023. 10

『私労働小説』ブレイディみかこ著 KADOKAWA 2023. 10

『まんがでわかるだましの手口』佐藤正明著 東京新聞 2023. 9

『古本食堂』原田ひ香 角川春樹事務所 2022. 3

『夜明けのすべて』瀬尾まいこ著 文藝春秋 2023. 9

『わが母中村久子』中村富子著 春秋社 1998. 1 ☆

『草木とともに』牧野富太郎著 KADOKAWA 2022. 6 ☆

『おひとりさまの逆襲』上野千鶴子・小島美里著 ビジネス社 2023. 5 ☆

『仁木ふみ子追悼文集』仁木ふみ子追悼文集編集グループ 2023. 11. 25 ☆

教育図書館のご案内

《利用方法》

開館時間：午前10時～午後4時30分

開館日：（火）・（水）・（木）

閲覧：メールにて事前予約をお願いします。

✉ toshokan32304437@jec.or.jp

貸出：利用者カードの発行が必要です。

身分証明書をご持参ください。

（貸出冊数5冊 期間3週間）

レファレンス・サービス

当館所蔵の図書・雑誌、教育に関するお問い合わせはメールにてお願いいたします。

コピー：白黒1枚10円／カラー30円

《特別コーナー》

- 平和資料コーナー

反核（原発関連を含む）・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など

- 日教組刊行物コーナー

日教組教育新聞・教育評論・月刊JTUなど

- 教育総研刊行物コーナー

年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など

- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ

- 都道府県・高教組史誌、同機関誌

- 文部科学省統計調査報告書・刊行物

学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導要領、指導書など

- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書

- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書

- 人権・防災・減災コーナー

人権関係、東日本大震災など災害の記録など

《蔵書について》

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 蔵書数 約70,000冊
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面から検索できます。

(<https://www.jec.or.jp/tosho>)

《アクセス》

神保町駅 A1出口より徒歩3分

九段下駅 6番出口より徒歩7分

竹橋駅 1b出口より徒歩5分

水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

アクセス抜群

神保町駅から3分

802名収容の大ホール



**10～300名
まで使える
会議室(18室)**

**1階画廊
もご利用できます**

一般財団法人日本教育会館

TEL 03-3230-2831
<https://www.jec.or.jp/>
受付時間 9:00～17:00